
俺の手で

夕霧緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の手で

【Nコード】

N2031B

【作者名】

夕霧緋色

【あらすじ】

魔法を習う少年、ルインと、歌姫セーナ。2人の村に伝わる伝説と、2人に起きた事件とは…。

前編

森の中にぽっかりと広がる林間地。木苺の茂みからは甘酸っぱい香りが漂い、小川の水がさらさらと流れる音が心地良い。足元の芝はやわらかく、午後の日差しも暖かい。ごろりと仰向けになって寝転がるにはこの上なく快適な場所だった。

その林間地に、少年が1人と、少女が1人。並んで座っている。

「セーナ、歌ってよ。」

「ここじゃだめよ。森の魔物が寄ってきちゃうじゃない。長老にもだめって言われているのよ。」

「そっか。あーあ、聞きたかったなあ。」

「ルインこそ、魔法の授業、戻らなくていいの？」

「別にいいよ。僕、今日の授業でやることも全部できるからさ。」

少年の名は、ルイン。まだ魔導師見習いだが、魔法の才能にあふれ、天才や神童と呼ばれている。隣にいる少女はセーナ。村の歌姫で、妖精のような美しい声を持っている。こちらも天才と呼ばれている。

「セーナこそ、こんなところで遊んでいいのか？」

「大丈夫よ。長老も大魔導師も、お昼休みだから気づいてないわ。」歌姫は、村の中の何人もの少女の中から、たった1人だけ選ばれる。そして、選ばれた少女は村の長老と大魔導師が暮らす屋敷の一角に住み、毎日歌と神の教えを学んで暮らすのだという。さらに、魔導師以外の者とかかわりを断絶しなければならないという厳しい掟がある。しかし、歌姫に選ばれるということは最高に名誉なことなのだ。

「そういえば、セーナ。前から気になってたんだけど、『森の魔物』って一体何なの？」

「ルイン、知らないの？」

「あんまり昔話とか聞かなかったからさ。よく覚えてなくて。」
「もう……。」

2人の住む村にある、伝説。

昔、この地に魔法と歌を愛する神が降り立ち、人々にこう告げた。

『歌を愛せよ、魔法を愛せよ。我はこの地に恵みをもたらす神なり。我は汝らに力を授ける。この地に生き、この地に没し、歌と魔法を広めるがよい。』

人々はその神の言うとおり、歌を愛し、魔法を愛し、この土地に住み着いた。すると不思議なことに、災いという災いは全て起こらなくなり、驚くほどの勢いで村は豊かになっていった。その頃に、魔導師の学校が設立され、歌姫を選ぶ風習も確立されたという。しかし、ある時、思いもよらぬ事件が起きた。

夏の祭。毎年、森の中の林間地に祭壇を組み、やぐらを建てて行われる、神への感謝の儀式。歌姫は祭の最後の夜にやぐらへ登り、神へ感謝の歌を捧げる。

その感謝の歌の儀式で、事件は起きた。

真っ白な衣装に身を包んだ歌姫が、やぐらに登る。

神への祈りを捧げて、天使のような歌声が響いたその瞬間だった。

「グルルルルアアア！」

真っ黒な体に、赤くきらきらと光る目。背中に生えた禍々しい翼。手には鋭く長い爪。魔物としか言いようのないその恐ろしい姿に、歌姫も、人々もみな凍りついた。

そして、次の瞬間、歌姫と魔物は人々の前から消えていた。

初夏の柔らかな風が過ぎていく。

「……その魔物はね、最初に出てきた神様の魔法で封じ込められていたんですって。」

「へえ……。」

セーナはどこか遠くを見ながら話していた。

「それで、続きはあるの？」

「うん。」

セーナは再び話し始めた。

歌姫を奪った魔物は、村を破壊し、人を殺し、暴走した。再び、魔物を封印するために、村の魔導師という魔導師が集まって、歌姫を奪われたその土地いっぱい魔法の環を描いた。

そして、魔物が再び林間地に足を踏み入れたそのとたん、まばゆい光が当たりを包み込み、魔法の力が魔物を地下の奥深くに封じ込めた。

それ以来、歌姫はこの森で歌うことを禁じられている。

魔物が再び、地上に姿を現さないように。

「ルイン、ここで歌っちゃいけない理由、わかった？」

「うん。……でも。」

「でも？」ルインはかかえたひざにあごを乗せて言った。

「どうしてその魔物、倒さなかったのかな？力のある魔導師がいっぱいいたなら、それくらいやつつけられるだろう？」

それもそうね、とセーナは微笑んだ。

「きっと神様のお告げがあったんじゃないのかしら？魔物を殺してはいけない、って。」

「そうかもな。うん、きっとそうだ。」

今座っているこの土の下に、恐ろしい魔物が眠っている。そう考えたら、少し怖くなってしまった。でも、こんなこと、セーナに言ったら笑われちゃうな。

「ねえ、ルイン。」

「ん？」

「あと何年なの？」

「……ああ、それか。」

セーナが言っているのは、魔導師の掟のことだ。

魔導師の道を選んだものは、幼い頃から魔法を学び、18になると旅に出なければならぬ。それは、魔法を極めるための修行で、どんなに危険な場所へもたった1人で行かなければならない。旅に出

たきり帰ってこない者も多くいる。そして、一定の期間が過ぎると、再びこの村へ戻ることができる。その時には、大魔導師として屋敷に住むことが決まっている。

「あと、5年だな。」

「そっか……。あと5年なのね。」

そう言ったセーナの表情は、どこか寂しげだった。

「大丈夫だよ。あと5年、もっと魔法の勉強するんだからさ。きつともっと強くなるさ。」

「そうね。ルインなら大丈夫ね。」

風が吹き、さわさわと森の木が揺れた。

「そろそろ戻ろうかな。見つかったら怒られるわ。じゃあ、またね。」

「またね。」

セーナは長い藍色の髪をなびかせて、村のほうへ走っていった。

「……あと5年か。」ルインはつぶやいて立ち上がり、魔法学校のほうへ歩いていった。

「魔導師ルイン、そなたに旅の杖を授ける。魔法の道を極め、自らの鍛錬の旅に出よ。」

真新しいローブに身を包んだルインは、ひざまずいてその杖を受け取った。

18歳になった、穏やかな初夏の日。ルインは修行の旅に出る。

「では、行くがよい！そなたの身に神の御加護のあらんことを！」
村人たちに見送られ、ルインは村を出た。

村のはずれの、林間地。あの日と同じ、穏やかな陽の光が射していた。

「ルイン！」

「セーナ!？」

林間地に立っていたのは、歌姫、セーナ。

「……どうして、ここに？」

セーナに歩み寄り、たずねた。

「見送りに来たのよ。」

「でも、セーナ、お前……。」

本当なら、セーナはここにいてはいけないのだ。長老たちの屋敷で、旅人への祈りを捧げているはずなのだ。

「だって、歌ってあげたいんだもの。ルインのために。」

「え……?」

「あの日に言ったじゃない。私の歌が聞きたいって。だから私、ルインのために歌を作ったのよ。」

あの日から5年間、俺とセーナは数えるほどしか会っていない。

「だって、ここ……。」

セーナが話してくれた、魔物の森じゃないか。

俺がそう言うと、セーナは微笑んで、言った。

「そうよ。だから、ルイン、守ってよ。魔法で私のこと、守って。失敗したら、俺はセーナはもちろん、故郷であるこの村をも傷つけることになる。」

「……わかった。」

この頼みを断ってしまったら、俺が俺でなくなってしまうような気がした。セーナを裏切ってしまうような気がした。

さっき貰った旅の杖で、大きな魔法円を描く。セーナを守れるように。魔物が暴れないように。魔法の記号や呪文を書き加え、自分が知っている限りの守りの呪文をかけると、魔法円は白く輝いた。

「歌うわね。」

俺は力強くうなずいた。

セーナが大きく息を吸い、俺のための歌を歌う。

力強くて、優雅で、直接心に響いてくるような、素朴な歌だった。セーナの歌声は、どこまでも広がっていくようだった。

歌が終盤に差し掛かったところで、俺は異変に気がついた。

さっきまで力強く輝いていた魔法円が、弱々しく明滅している。

「セーナ！やめろ！逃げるんだ！」

遅すぎた。

魔法円は壊れ、地の底からうなり声を上げて黒い影が現れた！

「セーナ！」

黒い影、魔物がセーナに近づいてくる。

「逃げろ！セーナ！」

攻撃の魔法を投げつけるが、効かない。

「ルイン！」

魔物から発せられる生温かい不気味な風で、藍色の長い髪がなびいている。セーナが俺に助けを求めて手を伸ばす。俺がセーナの指先に触れた瞬間、目の前を黒い影がよぎった。

「嘘だ……。」

消えた。

魔物はセーナもろとも消え去った。

「セーナ……。」

俺のせいだ。俺の未熟な魔法のせいで、セーナは……。壊れた魔法円の上にくずおれた俺の耳に、声が聞こえた。

「ルイン！」

「セーナ！？！」

確かにセーナの声だ。

「セーナ、無事なのか！？どこにいるんだ？セーナ！」

「ルイン、逃げて！」

彼女の姿はどこにも見えない。

「お願い、逃げて！」

「でも……。」

「いいから早く！逃げて……！」

セーナの切羽詰った声に押されるようにして、俺はその場を逃げ去った。

俺は、セーナを殺してしまった。

唯一の親友だった、セーナを、俺が殺した。

「俺のせいだ……。」

俺のせいで、セーナは……。

後編

「ルインさん、届けて欲しいものがあるのだが、いいかね？」

「ええ。どうぞ。」

修行の旅は、続かなかった。いや、続けられなかった。魔法を使うたびに、あの時の出来事が蘇って、俺を襲う。

セーナを殺した。その記憶の痛みに耐えられなかった。

村からもっとも離れた、名も知らぬ土地に家を建て、魔導師のロ―ブも脱ぎ捨て、呪文書も焼き払った。

俺は知らない土地で便利屋として生きることにした。

「私の工場で作った織物だ。大事に扱ってくれ。」

男から受け取ったその布には、見覚えがあった。

「ここからだといふ遠くて、申し訳ないのだが……。」
いやな予感がした。

「リート・マヒアの魔導師の屋敷だ。大きい屋敷だから、行けばわかる。」

リート・マヒア、俺が生まれ育った村。俺がセーナを殺した、あの土地。

脳裏にあの光景が蘇る。

「ルインさん、顔色が悪いが、大丈夫かい？」

「はい、すいません、大丈夫です。わかりました。リート・マヒアの魔導師の屋敷ですね。」

「ああ、そうだ。頼んだよ。金は先払いだったな……。」

「いいです。お金はいりません。」

財布を出そうとした男の手を止める。

「いいのか？」

「ええ。サービスです。」

違う。

あの土地に行ったら、もうここには戻れない気がする。

「ありがとな。じゃ、よろしく。」
男は店から出て行った。

「…着いた。」

戻ってくるつもりなんて無かった。
道の向こうに、村が見える。

俺が旅立ったあの日と、何も変わらずに、その村はそこにあった。
ふと、真正面に見える村から視線をそらすと、そこにはぽっかりと
開けた林間地があった。

俺がセーナを殺した場所。あの日と同じように、柔らかな風が吹いている。

気がつくと、俺の足は村ではなくて、林間地に向かっていた。

林間地に1歩踏み入れると、先ほどまで穏やかだった風が、急に強く吹きつけてきた。

「…魔法？」

足元をよく見ると、かすかに魔法円を描いた線が見える。
あの日に俺が作ったものではない。村の大魔導師が描いたものだろう。

…俺が呼び出した魔物を鎮めるために。

風で目が乾いて痛かった。

目を細めて、林間地の中央を見る。

そこには、白い歌姫の衣装を着た少女が立っていた。

「セーナ…？」

おそるおそる呼びかけてみる。

風になびく長い藍色の髪は、間違いなくセーナのものだった。

「セーナ」

さつきよりも大きな声で呼びかける。

すると、少女はゆつくりと振り返って、俺を見た。

「…違う。」

セーナじゃない。

あいつはセーナじゃない。

振り返った少女の顔は、怒りのためだろうか、それとも憎しみのためだろうか。

醜くゆがんで、鬼のような形相をしていた。

少女はゆつくりと俺に近づいてくる。

「…誰だ。お前、誰なんだよ。」

少女は何も答えない。

「何か言えよ…。なあ、何か言ってくれよ。」

恐怖で胃がきゅっと締まる感じがする。

「…そうだ、お前、何て名前なんだ？」

俺が尋ねると、少女はぴたりと足を止めた。

「俺は、ルインだ。ルインって名前だ。…お前は？」

少女が口を開いた。

その声を聞いて、俺はめまいを起こしそうになった。

「わたしはセーナ。」

…嘘だ。

「あなたに殺された、セーナよ。」

…嘘だ。嘘に決まってる。

「あなたのせいで、あなたのせいで、わたしは…。聞きたくない。聞きたくない。」

何も言わないでくれ…。

「そうだ…。俺のせいだよ、セーナ…。」
ぎゅっと目をつぶる。

ふと我に返ると、セーナの声がもつと違う声になっていることに気がついた。

そつと顔を上げて、少女を見る。

少女と、目が合った。

「わたしたちの苦しみを知るがいい！」

何百もの人々の声が重なったような、少女の声。

「幼き頃から抑圧され、全てを耐え、何もかも奪われた、わたしたちの苦しみを知るがいい！」

俺ははっとした。

セーナの姿を使って話す、この声。

…今までの、全ての歌姫の声なんだ。

…この村に伝わる歌姫の風習。

小さな少女が魔導師以外の者とかかわりを全て断絶され、家族からも引き離され、毎日毎日『歌姫』になるための訓練をさせられる。そこには本人の意思なんて存在しない。全ては魔導師と、村の掟によって決められる。

「セーナ…。」

どれほど苦しかったのか、俺にはわからない。

セーナの姿を借りた歌姫たちの声は、いつの間にか、嘆きの歌を奏でていた。

周囲に邪悪の気配が満ちる。

「今度こそ、俺が助けてやる。」

魔物が姿を現した。

魔物はあの日と同じように、強大だった。

でも、俺はひるまなかった。

この村に伝わる魔法は、決して他の土地で伝えられることは無い。

それがなぜなのか、今、やっとわかった。

…大魔導師はこの魔物から力を得ている。

：そうでなければ、こんな魔物、とつくに退治されていていいはずだ。

腰につけていた短剣に手をかける。

：だから、この魔物がいなくなれば、魔法は無くなる。

：歌姫の風習も無くなる。

大きな唸り声をあげて襲い掛かってきた魔物に、俺はためらうことなく短剣を投げつけた。

魔物の喉にまっすぐに短剣が突き刺さる。

「ヴォオオオオオオオ！！！」

魔物が断末魔の叫びとともに消え去った。

次の瞬間、村から青い炎が柱となって天に昇るのを、俺は見た。

あれは、確か…。

大魔導師の屋敷にある、魔法の水晶の色だ。

村で魔導師たちが大騒ぎになっているのが聞こえた。

「セーナ…。」

林間地を見回す。

少女の姿は、消えていた。

俺は急に眠くなった。

：ここまで旅して、魔物を倒して…きつと、疲れたんだ。

芝生の上にどさっと倒れる。

：ちょっとだけ、休んでいこう。

俺はそのまま、目を閉じた。

夢を見た。

楽しそうにセーナが歌っている。

俺と一緒に遊んでいる。

セーナは自由になったのだ。

青い炎は村を包み込んだ。
ルインが倒れた林間地にも、青い炎は近づいていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2031b/>

俺の手で

2010年10月9日19時26分発行